

没後 50 年 坂本繁二郎展

練馬区美術館（中村橋）

2019. 07. 14～09. 16



「坂本繁二郎」(1882～1969)は、ヨーロッパ留学前は「牛」、帰国後は「馬」、戦後は「静物」、晩年は「月」を主なテーマとして取り上げた画家である。画伯は、20歳で同級生の「青木繁」を追うように上京し、「小山正太郎」の主宰する不同舎に学び、次第に頭角を現して「二科会」創立に参加する。

その後、展覧会出品作が数々の賞を受けるなど順風満帆な画業をスタートさせ、29歳時に渡仏して3年間の留学生活をし、欧州の自然に見せられて作品は育んだ明るい光と風に虜に、色彩はより鮮やかさを増したものになった。

そして、物の形を単純化し色彩を重ねることで表現され、写実を超えてみる者の想像力へ訴える画法へと進化を遂げ、この画法を用いて肖像画にも挑み、《帽子を持てる女》は優しく強さをも秘めた存在感を持つ女性を描き高く評価されている。第二次大戦後は、「梅原龍三郎」「安井曾太郎」と並ぶわが国の洋画家の巨匠と見なされるようになり、1956年には【文化勲章】を受章している。

本展は、没後50年にあたり、画伯の最初期から晩年までの絵画が成熟していく過程を人生の歩みとともに明らかにしていくもので、「約140点の油彩、水彩、水墨画等」に加えて、盟友「青木繁」の作品も合わせて展示がされている。



上：坂本繁二郎 《月》1966年 油彩/カンヴァス

小さな窓越しに見える月の冴えわたった輝き、動こうともしない雲、それらが作る静寂の世界に強く見せられる。

左：坂本繁二郎 《放牧三馬》1932年 油彩/カンヴァス

馬が立っているとその背景までも、これに伴奏して美しい諧調をなすもので、「馬体の品格である」という画伯の気持ちがそのまま示されている。

右：青木繁 《朝日 (絶筆)》1910年 油彩/カンヴァス

海水は黒々としてうねりは重い。だが空は晴れ晴れとして雲行きは軽い。晴れやかな明るい夜明けを念じているのは、まさに「朝日」である。